# ＹＯＵ ― もしも僕が…。 ―

雪乃　静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＹＯＵ　―　もしも僕が…。　―

【Ｎコード】
Ｎ７１８２Ｉ

【作者名】
雪乃　静

【あらすじ】
この物語はＹＯＵ　―　君に会いたくて　―のサイドストーリとなっております。
現実ではありえないだろうと思われる出来事ながら、世の中には不思議なことがたくさん起こります。
そんな不思議を描いてみました。

「しっかりしろ。今、救急車が来るからな」

あと少しだったのに…。

僕は薄れゆく意識の中で呟いた。

「シュウ、行くぞ」

「おう」

僕と保坂は入社二年目にして、既に営業所内でも一目置かれるほどの存在になっていた。

僕達は性格も営業方針も違ったライバルでありながら、その一方で、何故か気の合う友達でもあった。お互いが相手の成績などには全く興味がなかったことが幸いしたのかもしれない。

新人研修で知り合った僕達は、配属先も一緒だった。そして配属されて間もない頃、僕達は行きつけの居酒屋で、社会人になった記

念に二人だけの計画を立てた。特に大それた計画ではない。ただ営業所のみんなが来ない僕達だけの居酒屋ではない酒場を探し、そこの常連になろうというものだった。僕達にとっての大人への第一歩、社会人としての自覚はそんなところにあった。

初めは安易に考えていたこの計画も、いざ実行してみると、作業はすぐに難航した。僕と保坂の住まいの中間に地域を限定したのも原因だったが、「いいな」と思った店には既に先客がいたからだった。

僕が昼間、営業の合間に住宅街の一角にようやくその店を見付けたのは、ひと月の時間が経った頃だった。

外見は一見、何処かヨーロッパの片田舎を想像させる趣だった。白いレンガの壁に、上部がアーチ状になった小窓が二つ並んでいて、その窓にも白いレースのカーテンと色とりどりの花が飾られている。しかし中は壁で目隠しされているようで見えない。

“スナック”の文字の下に筆記体で“リップ・スティック”。その下に小さくカタカナで“リップ・スティック”と添えられている。ドアの横に店の名がなかったら、僕にはここが店なのかどうかも分からなかっただろう。

その夜、僕は早速保坂を伴って仕事帰りにその店のドアを開けた。昼間とは違って、ピンクのネオンがその文字を浮き立たせている。もしもカタカナがなかったら、僕はスナックの名前も分からないままドアを開けていたに違いない。

「おかえりー」

カラオケの鳴り響く中、初めての客である僕達に、ママの軽快な声。

店内を見渡すと、既にテーブル席は満席で、カウンター席しか空いていなかった。

店内はカウンター席の他に、フロアーの向こうの両脇にテーブル

席が二つづつあり、その先にカラオケのステージが設けられていた。
「こっちでもいいかなー」
ママがカウンターを指差す。
僕達はどの店に行ってもカウンター席にしか座らなかったから、初めからそこに座るつもりだったのだが、ママには僕達がテーブル席が空いていなくて困っているように見えたらしい。
「なんにする？」
席に着いた僕達に、ママはおしぼりを手渡しながら笑顔を向けた。
「じゃあ、とりあえずビール」

店の雰囲気は悪くない。ママもいい人そうだし、見渡したところ、ここにいる客の中に営業所の顔はない。ここまでは保坂も同意見だったようで、僕達はアイコンタクトでＯＫを出し合った。あとはこの店が営業所の連中に知られていないことを祈るだけ。
二人で一本のビールはあっという間に空になり、僕達はいつものパターンのウーロン茶と焼酎のボトルを注文した。

「真ちゃん達もなにか入れて？」
それまで歌を歌っていなかった僕達に、頃合いとばかりにママは“うた本”を手渡した。
ちなみに“真ちゃん”とは、この席に着いて早々にママが付けた保坂の呼び名で、僕は“シュウちゃん”と名付けられていた。
「じゃぁ」
保坂はパラパラと“うた本”を捲ると、すぐにリクエストナンバーを告げたが、僕は眺めるだけでなかなか曲を決めなかった。
「シュウちゃんは？」
「んー、まだ」
ゆっくりゆっくり、もたもたと、僕は一ページ一ページ読むよう

にページを捲った。

「おっ」

保坂の曲が流れてきた。しかし勢いよく立ちあがったまではよかったが、順番を待っている間にそこそこの酔いを身に着けていたようで、ステージに向かうその足取りにはふらつきが見えた。僕と違って保坂は意外とアルコールに弱かった。

「ママ、ちょっと」

これまでの店でもそうだったのだが、僕はほとんどがこのタイミングでママに手招きをする。

正直に話すこと。それはプレッシャーになるほどのことではなかったが、店の常連になるにあたっての、僕だけに課せられた必ず解決しておかなければならない問題となっていた。

「ん？　決まった？」

ママは僕が選曲し終えたと思ったらしく、顔を寄せた。

「実は…、俺、音痴なんだ」

ママの近づいた耳元に、僕は耳打ちするように打ち明けた。

「うん」

僕の告白に、ママがニコッと微笑んで頷いく。

「じゃぁ、しょうがないよね」

今までの店の中には、露骨に嫌な顔をするママもいたし、微妙に態度が変わるママもいた。表情や態度には出さなくても、なんとなく僕から敬遠してしまう店もあった。なのにこの店のママの声は優しかった。どうしてそう感じたのかは分からないが、正直言ってこんなことは初めてだった。

「そのかわり、いっぱい飲むね」

「無理しなくていいのよ」

僕はその後、ボトルを二本空けた。

この日から僕達は、まだ営業所のみんなには知られていないと判明したこの店の、自他共に認める常連になるべくリップ・スティックに通い詰め、保坂は歌いまくり、僕はべろんべろんになるまで、湯水のように給料をつぎ込んだ。そして、いつしか「シュウ、行くぞ」、「おう」は毎週土曜の僕達だけの合言葉になっていた。

七月二十六日

今日、営業の途中に時間があったので、数日分の食料とアルコール類、それに酒のつまみを買いに“ワールド・ホームセンター”に立ち寄った。

時間は午後三時頃だったと思う。肉売り場で見かけた女性が凄く可愛かった。熱心に肉のケースの中を覗き込んでは、肉を吟味しているようだったが、そこだけ輝いて見えるほどだった。白地に黒の格子模様の大きな襟のワンピースと白のハイヒールがよく似合ってた。

でも不審者と思われては一大事なので、それからは売り場をうろつきつつ距離を置いてチラ見の連続。彼女がレジに並ぶとすかさずその後に並んだ。

彼女のカートの中の買い物かごには、俺も買った豚肉の切り落としのパックがなんと三パックもあった。その他にも大量の野菜にサ

ケの切り身がたぶん四切れと、赤ワインが一本。
指輪はしていなかったけど、これってやっぱり結婚しているってことなのか？　だとしたらショックだよな。って、俺がショック受けてどうすんの。
まあ、あれだけ可愛いんだから結婚しててもおかしくないけど、俺としてはやっぱり独身であってほしいよ…。
でも、たとえ独身だったとしてもあんなに可愛いんだもん、彼氏はいるんだろうな、やっぱり。
えっ、じゃぁ、あれって彼氏との分？
…ってことは同棲？
いや、彼女に限ってそれはないだろう。
…ないと思う。
…ないと信じたい。
ともあれ、今日の日を記念してここに記す。
また会えたらいいな。…会いたいな。

八月二日
一週間ぶりの買い出し。わくわくして行ったが今日は会えず。うーん、残念。

八月九日
今日もダメだった。やっぱり会えなくて当たり前だよな。

八月十二日
よーし、今日から夏休みだ。ということで昼から六時まで張り付いてみたがダメだった。でもめげな　いぞ！　夏休みはまだ始まったばかりだ。これから毎日行ってやるぞ。

八月十三日
今日も昼から張り付いた。彼女は来なかった。

八月十四日
今日も会えなかった。

八月十五日
今日も会えず。
なぜ会えない？
やっぱりあれは偶然だったということなのか？
彼女は何処の人なんだろう。この辺の人じゃないのかなぁ。
ただ単に用がないから来ないだけなのか、それともこの辺の人じゃないから来ないのか。
あぁぁ、もう、どうなってんだよ。

八月十六日
今日で休みも終わるというのに結局会えず。でも考えてみたら、俺が休みってことは、彼女も休みな　んじゃないか？　だったら遊びに行っちゃうよな。
あーあ、今頃気付くなんてバカだよな。
うん、きっとそうなんだ。だから来なかったんだ。
…そう信じたい。

八月十七日
やっぱり今日も会えなかった。

八月十八日
今日も結果は同じ。

八月十九日
今日も結果は同じ。

八月二十日
今日も結果は同じ。

八月二十一日
今日も。

八月二十二日
会えず。

八月二十三日
今日も。

八月二十四日
今日も。

八月二十五日
ハァ。…もう会えないのかなぁ。

八月二十六日
会えず。

八月二十七日
会えず。

八月二十八日
今日も。

八月二十九日
ハァ。

八月三十日
やったー。やった、やった、やった、やったー。とうとう彼女に会えた。
長かったぁ。約ひと月ぶりだよ。ほんとながかった。もう会えないんじゃないかと思ってたから、今　日は嬉しいの一言。
うーん、感動。
でも、明日からなんと、一週間の出張だってさ。ハァ、やっと会えたのに。って、明日行ったからっ　て会えるとは限らないか。

九月七日
昨日は帰りが遅くなって断念。今日、一週間ぶりに行ったがやっぱり会えず。そうそう会えないのは　分かっている。でも、この気持ち、…辛いよ。

九月八日
…俺、泣くか？

九月九日
会えた、会えたよ。ほんとによかった。これって奇跡？
あぁ、言葉にできない。
今日は幸せだ。

九月十日
驚きだ。また会えた。しかも今日は目が合っちゃったよ。うーん、あの時はドキッとしたなぁ。

九月十一日
凄い。またまた会えた。また目が合っちゃった。しかも今日は彼女が微笑んだ。あー、ドキドキし　た。

九月十二日
　またまたまた今日も会えた。このところ毎日会えている。これはほんとに凄いことだ。
　いいね。いいよ。実にいい。
　今日も目が合って彼女が微笑んだ。
　気のせいかもしれないけど、彼女、俺を意識してなかったか？
　どうする？　俺。
　今度、話しかけてみるか？

九月十三日
　一時間いたが今日は会えなかった。がっかり…。

九月十四日
　今日も会えなかった。どうしたんだ？

九月十五日
　今日も彼女は来なかった。

九月十六日
　もう、仕事が手につかない。

九月十七日
　会いたい。もう一度だけでもいいから会いたい。

九月十八日
　会いたいよ…。
　…もう会えないのか？

九月十九日
　今日で会えなくなって一週間。

嫌われたのかなぁ、俺。
でも、なにもしてないぞ。
なのになんで？

僕はそれでも諦めきれずに、この日以降も彼女に会える確率が一番高い時間にホームセンターに出向いていた。しかし、彼女にはそれきり会うことはなかった。
ホームセンターの肉売り場で一目惚れした僕は、生まれて初めての感激と感動を残したくて、書いたこともない日記を柄にもなく書き始めたが、クリスマス・イブを最後に、五ヶ月間の片思いの終わりとともに日記帳を閉じた。

「おかえりなさーい」
リップ・スティックに通い詰めて一年ほど経った頃、いつものようにドアを開けた僕達を、初めて耳にする声がカラオケの轟音にも負けることなく出迎えた。
えっ。
と同時に、カウンターの向こうで照明に照らされた、あの時と同じ白地に黒の格子模様の大きな襟のワンピース姿の彼女が僕の目に飛び込んだ。

―なんで？
衝撃だった。目の前の現実が信じられなかった。
奇跡の再会。この思わぬ再会に、僕の諦めたはずの、忘れたはずの感情が一瞬にして蘇り、僕は当然の如く、相変わらずの可愛さと輝きを放つ彼女に再び一目惚れの恋をした。
「真ちゃーん、シュウちゃーん、おかえりー」
不意にママの声に振り向くと、ママが接客中のテーブル席から僕達だけの笑顔を振りまいている。
僕は保坂とともに軽く手を振ってママの笑顔に答えると、平静を装って、今や土曜の夜の指定席となっていたカウンター席へと向かった。
彼女がだんだん近くなる。今までにない距離、未知なる距離への突入。僕は平静を装う中で、動揺が緊張に変わっていくのを感じた。
「はじめまして。今週からお世話になります、優和です。よろしくお願いします」
席に着くと、満面の笑顔で彼女がおしぼりを手渡す。
へぇ、“優和”っていうんだ…。
その名前が本名かどうかは分からない。しかし、初めて知った彼女の名前に、僕は緊張しながらも感動を覚えた。
「よろしく」
保坂が微笑む。
「よ、よろしく」
保坂と違って僕は、この夢にまで見た状況に、目の前で彼女が微笑むこの状況に、緊張がなくなるはずもなく、引き攣った笑顔で言葉をどもらせてしまった。
「あー、もしかして緊張されてます？」
彼女の悪戯顔が僕を見る。
「当たり前じゃん。だって優和ちゃん可愛いんだもん」
的を射抜かれてドキッとしていると、まるで助け船のように保坂が手を拭きながら割って入った。

保坂は僕なんかよりもはるかに女性の扱いに長けている。僕は保坂のそういうところは好きになれなかったが、今はそういう保坂であってくれたことに感謝だった。
「もう、お客さんたらお上手」
「ほんとだってぇ」
「そうですか？　それはそれはありがとうございます」
彼女はぺこりと頭を下げた。ただ、まだ客とのこういった会話に慣れていないのか、彼女の顔にはいろんな意味のこもった表情が見え隠れしていた。
「―で、なににします？」
「んー、じゃぁ、ビールで」
保坂は人差し指を立てた。

会話のイニシヤチブは、終始、保坂が握った。僕は相槌を打つか、たまに質問するくらいだったが、それでもこんな近くで彼女の顔を見られて、しかも会話までしている自分に満足していた。
ただ、彼女は僕のことを覚えていないようだったが。

「真ちゃん、シュウちゃん、なにか入れて」
「おう」
保坂は“うた本”を手にすると、さっさと曲をリクエストしたが、僕はこの店に初めて来た時のように、一ページ一ページ読むように、ゆっくり、もたもたとページを捲っていた。
「シュウちゃんは？」
「うーん、まだ」
早く諦めてくれ。早く彼女が歌を勧めるこの時間が過ぎてくれ。なんとか無難にこの時間をやり過ごしたい。
今までどうってことのなかった問題が、初めて僕に重くのしかか

ってきた。
　こんな時、ママがここにいたなら、きっと上手くフォローしてくれただろうに、いや、気付いてくれるだけでも、ママだったら上手く助けてくれただろうに、今はカラオケの騒音の中で客とのお喋りに夢中になっていてその望みは非常に薄い。
　僕は隣で楽しそうに話している保坂が羨ましかった。
「シュウちゃん、決まった？」
　話の合間に彼女が微笑む。
「シュウは歌わないよ」
「えー、なんで？」
「だってこいつ、歌うの大っ嫌いだから。―いつもそうなんだ」
「…そうなんだぁ」
　また僕は保坂に助けられた。
「なんで嫌いなの？　楽しいよ、歌」
　真顔に不思議が混じったような表情で僕を見る彼女に罪はない。誰だってこの話の成り行きなら、嫌いな理由を聞くのは当然だと思うから。でもそれは僕にとっては望ましくないことで、答えに困った僕は、結局、訳の分からない理由を口にして、場の空気を濁してしまった。
　その後のことは、頭の中が自己嫌悪で一杯になり、覚えていない。
　いつものように「俺、音痴だから」と断っていれば、こんなことにはならなかったはずなのに、何故か彼女にはそれが言えなかった。
　本当は、歌うことは嫌いではない。むしろ好きと言っていい。レパートリーだって沢山あるし、一人の時なら音痴にもならない。それどころか、保坂よりも上手く歌える。そんな僕が人前では音痴になってしまう理由。それは大学の寮での新入生歓迎コンパの時だった。
「じゃあ、次、誰だ」
「押ス、中山です」

「よーし、中山、行け」
「押ス、歌わせて頂きます」
先輩からの強制で、僕達一年生は食堂に設置された簡単なステージで一人づつ歌わされていた。
めちゃくちゃ上手い奴、おいおいと思ってしまう奴、当たり障りのない奴などの様々な歌の後に僕の番が来た。
僕はそれまで家族や友達の前でしか歌ったことはなかったが、歌唱力には自信を持っていて、意気揚々にステージに上がった。
えっ。
……。
いざステージに上がってみると、今まで経験したことのない“他人”の視線。自分に注がれるその視線に、たちまち僕の膝はガクガクと震えだした。
画面に映し出された歌詞が青く流れていく。
やばっ。
僕はいきなり出だしから音程を外した。
やばっ。
やばっ。
やばっ。
なんとか修正しようとしても更に音程を外すばかりでどうにもならない。
……。
僕はその悪循環に収拾がつかなくなったまま歌い終わった。
「中山、よかったぞー」
「中山、面白すぎー」
僕は大爆笑を浴びながらステージを下りた。
それ以来、この時の緊張と屈辱が恐怖になり、僕は二度と人前で歌わなくなった。
そんな僕が苦し紛れに口にした“嫌いな理由”。

「実は俺、医者に止められてるんだ」

彼女には会いたかったが、僕の自己嫌悪はあれから一向に治まることはなく、結局あの日を最後にリップ・スティックから遠ざかっていた。

僕の心情を知る保坂は、あえて何も言わず、ただ静かに僕の復活を待っていてくれていたが、それでも僕が復活することはなかった。

「シュウちゃん、優和でーす。今度の日曜、ひま？　暇だよね。一時に“ＤＯＮＤＯＮ”で待ってるから絶対来てね。絶対だよ。あ、でも真ちゃんには秘密ね。じゃあねー」

優和ちゃんだ…。

留守電の中の彼女の声は、僕の自己嫌悪なんか“小事”とばかりの明るさだった。そして、たった一度しか話していないのに、久し振りに聞いたその声は、僕に物凄い懐かしさを感じさせた。

「―暇だよね。って…」

随分じゃん。

変わらずの明るい声の留守電は、僕に強制を強いていたが、まさかの彼女からの電話に、僕の頬は緩んだ。

あれからもう、ひと月が経っていた。

“ＤＯＮＤＯＮドーナツ”は、駅前のロータリー沿いにある百貨店の入り口にあった。三方がガラス張りになっているその店は、外からでも店内を見渡せたが、やはり死角はできる。だからといって、立ち止まって外からキョロキョロ覗くと変な人に思われかねないから、僕は死角になる席については諦めることにして、とりあえず見える範囲を歩きながらそれとなく見渡した。

まだ来てないみたいだけど…。うーん、でもこれは…ちょっと。

女性ばかりの、まるで女の楽園にも似たＤＯＮＤＯＮの店内と、レジで会計を待つ女性の列に僕はたじろいだ。

気を取り直して入り口の前に立ってはみたが、やっぱり目の前の自動ドアの向こうへの一歩がどうしてもためらわれる。

開けっ放しにされたガラス張りの自動ドアは、確実に誰もが容易に通ることができるのに、僕にはその向こうの空間が一種独特の空気で満たされ、開いたドアを境に見えない壁を造っているように感じられた。

いくら甘い物好きの僕でも、この女性達の甘い香りで満たされた空間はさすがにきつい。

約束の時間まであと十五分。

―ここで待つか…。

僕は女性の往来が激しい入り口を外れ、その向かいにあるショーウインドウに凭れかかった。
―いや、待てよ。
―もしも奥の席で待ってたら…。
僕は不審者に間違われるのを覚悟でウインドウに近寄ると、入り口の面から順繰りに、今度は目を凝らして念入りに探してみることにした。

―あ。
ロータリー側のウインドウを覗いた時だった。僕はとても心強い？　味方を発見した。それは、それまで観葉植物で陰になっていた一組のカップルだった。当然、カップルだから一人は彼氏。つまり男。
―なんだ、男もいるじゃん。
僕はホッとすると同時に、あの彼氏のように堂々と席に座ってしまえばどうってことはなかったかもしれないのに、つまらないことを気にして、自ら入りづらくしていた自分の自意識過剰さに恥ずかしくなった。
それにしても絵になるというか、そのカップルはＤＯＮＤＯＮの風景の一部として、なんの違和感もなく溶け込んでいた。
いいなぁ…。
その彼氏は実にいい表情をしていた。彼女を見ているその眼差しは、優しさに満ちた微笑みで彼女を包み込んでいるかのようだった。
彼をあんなにいい表情にさせるんだから、あの後ろ姿の彼女も、きっと同じ表情をしているんだろうな。いや、もしかしたらそれ以上なのかも。
―いいなぁ…。俺もあんなふうになれたらなぁ…。
僕は気付かれないように二人の時間を眺めた。

やばっ、もう一時になってる。
ただでさえあんなことをした僕を誘ってくれたというのに、ここで遅れることがあってはならない。
二人に見とれていた僕は、急遽ここでの彼女の探索をやめ、店内に急いだ。

―よかった、まだ来てないみたいだ。
彼女を探して店内の通路を奥まで進んだ僕は、そのまま入り口へと引き返し、入り口に一番近い席に腰を下ろした。
入り口に一番近い席。やっぱりこれが僕の精一杯の場所だった。
店内にはまだいくつかのテーブルが空いてはいたが、いざこの空間に足を踏み込んでみると、どうしてもこれ以上奥の席を選ぶことはできなかった。
……。
店内に目を向けようにも、目に映るのは女性ばかりで何処に視線を置けばいいのか分からない。
カチッ。
僕は手持ち無沙汰に煙草に火を点けた。
スー、フー。
テーブルには灰皿が寂しく一つ。
―コーヒー…。
―やっぱ買えばよかったかなぁ…。
僕はレジに列を成す女性達に混じることをためらい、コーヒーを断念していた。
かろうじて入り口の向こうの空間や腕時計に視線の置き場を見付けたが、それもそう長くはもちそうにない。
一分、二分、三分。時計の針はなかなか時を刻まず、僕の落ち着きのない視線は行き場を失くしていった。

カチッ、カチッ。
スー、ハー。
…やっと十分たった。
忘れていた僕の視線のもう一つの置き場、テーブルの上の灰皿。
その中の吸い殻は既に五本まで増えていた。
―ハァ、…まだかなぁ。
こういう時は女性は遅れて来るもの、と思っていた僕に不満はなかったが、この状況にはさすがに疲れる。
彼女を待つ彼氏の風景。
―そういえば、俺はあのカップルみたいにちゃんとここの風景の一部になれているんだろうか…。
あっ。
何気なく向けた視線の先に、今度は彼氏の顔は見えないが、ドーナツのショーケース越しの観葉植物の向こうに、あのカップルがいた。
へぇ、ここから見えたんだ。
遠目にはなるものの、彼女の顔がよく見える。
なるほど、彼氏があんな表情を見せるわけだ。可愛いじゃん。優和ちゃんには負けるけど。
僕は疲れを忘れ、再び彼等の時間にお邪魔した。

一時二十五分。
「シュウちゃん」
彼等に気を取られてると、入り口で彼女が合掌していた。
よぉ。
僕は久し振りということと、久し振りになった原因のバツの悪さからか、軽く手を挙げると、声にならない声で少しハニカミながら

答えた。
えっ、並ぶの？
ここに真っ直ぐ来ると思っていたのに、彼女は声を出さずに口をパクパクさせ、身振り手振りで何やら言いながらあの列に並んでしまった。
―ん？　なんだ？
彼女が何か話しかけている。でも、なんて言っているのか分からない。
僕は身振りで耳を傾けるが、彼女は笑顔を返すばかり。
―えっ？　なに？
彼女のパクパクは続く。
それからもずっと、彼女は僕の顔を見ては微笑んだり、口をパクパク開けただけのパクパク言葉で話しかけていた。
僕はそのおかげで時間を忘れることができたが、あれはきっと、彼女の気遣いだったんだと思う。

「ごめん、寝坊しちゃった」
彼女はキュッと目をつぶると、トレイをテーブルに置き、席に着いた。
「うわ、だいぶ吸っちゃったね。ごめんね、待たせちゃって。はい、これ。お詫び」
「あ、ありがとう」
彼女を目の前にして、改めて緊張が蘇ってくるものの、僕は彼女が置いたコーヒーをズズズッと啜った。
はー、やっと水分にありつけた。
思わずにんまりして顔を上げると、彼女もにんまりしていた。
「ん？」
「こんな入り口のとこじゃなくてもいっぱいあるよ、席」
彼女は店内の空いている席に目をやると、再びにんまり顔で僕を

見た。
「こ、ここだったらすぐに分かるだろ」
「ふうぅぅぅん」
少し首を左に傾げた彼女の顔がニヤニヤ顔に変っていく。
「な、なんだよ」
「んーん、べつに。元気そうだなーと思ってさ」
「ま、まあね」
戸惑う僕に彼女は続けた。
「驚いた？　留守電」
「保坂に聞いたんだろ？」
「ピンポーン。そうなの」
彼女の人差し指がピンと立った。
「シュウちゃんあれから全然来なくなっちゃったから、心配してたんだよ。真ちゃんに聞いたんだけど、シュウちゃんあの日のこと気にしてるんだって？　ごめんね、無理に勧めちゃって。ママから教えてもらったんだけど、シュウちゃんがそうだったなんて、私全然知らなくて」
「俺の方こそごめん。気分を害したよね」
「んーん、私は大丈夫。全然気にしてないから。だから…、また来て？　ね？」
彼女は微笑みながら、再び少し首を左に傾げた。
…やっぱ、可愛い。
「そうだね」
「ほんと？　絶対だよ？」
頷き、ニコッとして答えた僕に、覗き込むような彼女の顔が近づく。
ち、近い…。
今までにない彼女のどアップに、僕は思わず仰け反った。
「う、うん」
僕は、僕の視界一杯の彼女の顔にぎこちない笑みで頷いた。

「よかったぁ」
胸に両手を重ねると、彼女は大きく息を吐いた。
「私ね、シュウちゃんに『もう行かない』って言われちゃったらどうしようかと思ってたの」
彼女の安堵の笑み。
「ほんと、ごめんな」
「んーん」
はあ〜、やっぱ可愛いなぁ。
彼女の微笑みと仕草は、あの時の僕の自己嫌悪を優しく溶かしてくれていた。

「じゃぁ、それ以来誰もシュウちゃんの歌聴いた人いないんだ」
「たぶん。あ、でも一人の時とかは歌ってたりするから、もしかしたらいるかもしれない」
僕は保坂にでさえ話したことのない音痴になったいきさつを、あの時言えなかった“嫌いな理由”として打ち明けていた。
「私聴きたいなぁ、シュウちゃんの歌」
「え？」
「だって、誰も聴けないんだよ、シュウちゃんの歌」
「そうだけど…」
「じゃあ、決まりね。これからカラオケに行こう」
キラリと彼女の瞳が光ったような気がした。
「ちょ、ちょっとそれは…」
「ちょっと待っててね、急いで食べちゃうから」
彼女はドーナツを食べ始めると、僕の言葉を遮った。

あっ。
…いいなぁ。

あのカップルが僕の目の前を通り過ぎた。彼氏の早足に、その後ろを必死についていこうと、小走りにさえなろうかという彼女。しかし少し俯いたその顔には、なんとも幸せそうな笑みが零れていた。

―俺もあんな顔にさせられたらなぁ…。

「どうかした？」

「んーん、なんでもない」

「そお？」

彼女はそれ以上気にすることもなく、ドーナツを食べ続けた。

―でも、俺はこれからカラオケか…。

ハァ…。

「シュウちゃん、なに歌うの？」

彼女は僕がパラパラしている“うた本”を覗き込んだ。

「んー、なににしようかなぁ」

僕はこの期に及んで、まだ歌う決心がついていなかった。

「優和ちゃんから歌っていいよ」

「じゃあ、歌うね」

彼女が歌った曲は僕の好きな曲だった。リップ・スティックで既に彼女の歌唱力は分かっていたが、僕にはキーが高すぎる箇所があり、一人の時でも上手く歌いきれない曲を彼女はとても上手く歌った。おそらく僕がどう転んでも彼女の歌唱力には敵わないだろう。

こんなに上手く歌われた後じゃ、なおさら歌えないよ。
「どうだった？」
曲が終わり、その余韻に浸っていた彼女が満足気の顔で戻ってきた。
「いつ聴いても上手いなぁ、優和ちゃんは」
「そお？」
僕の感想にニコッと笑った彼女の笑顔は、満更でもなさそうだった。
「シュウちゃんは？」
「う、うん。―入れた」
覚悟を決めたわけじゃない。自分の音痴をよりによって彼女に披露しなければならないんだから、決められるはずがない。でも、もう歌うしかなかった。
ええい、こうなったら開き直りだ。

「音、外れちゃったね」
彼女は落ち込む僕に優しく微笑んだ。
案の定、結果は散々なものだった。たった一度の失敗によるトラウマと、彼女の前というプレッシャーで、緊張は過去にないものとなり、まず出だしを間違えた。そしてそのことに動揺した僕は、終始狂った音程のまま歌い通したのだ。
「大丈夫だよ。慣れれば絶対上手くなるから。だってシュウちゃん声いいもん」
「……」
「ほら、がんばろ？」
「……」
「ね？」
彼女の言葉に励まされながら、その後も僕は彼女と交互に何度も下手な歌を歌った。

「じゃあ、今日はここまでにしよ？　声、ガラガラになってるし」
「うん」
たった一日で僕の歌が上手くなるはずがない。当然のことだが兆しすら見せなかった。しかし不思議なことに「歌いたくない」から「まぁ、いいかぁ」に、「聴かれたくない」から「優和ちゃんにならいいや」に、僕の『歌う』に対する気持ちは変わっていた。

僕達はこの日から毎日、ＤＯＮＤＯＮで待ち合わせてはカラオケ屋に通った。やがて来るであろう復活の日に向けて。

「シュウ、行くぞ」
「おう」
「…お、おう」
これまでも土曜の夜になると保坂は合言葉を投げかけてくれていたのだが、その都度僕は断っていたため、復活したこのやり取りに保坂は喜びを隠せないでいた。

「おかえりー」
優和の笑顔の声だ。
「おかえり、シュウちゃん」
ママも微笑んだ。
どうやらママは今日までのいきさつを知っているらしい。
ああ、それにしても優和の「おかえりー」もママの「おかえり」も、久し振りすぎてなんだか照れ臭いな。
他の人はどうか分からないが、僕にはまるで何年ぶりかに里帰りしたような感覚だった。

「シュウちゃんの曲だよ」
「うん」
「へー、珍しいな、シュウが歌うなんて。俺、初めてだな、シュウの歌聴くの」
「まーな」
聴き慣れたイントロに、「これから歌うんだ」という覚悟を決めると、そのことが逆に僕を緊張させたが、この緊張は決して嫌なものではなかった。
「がんばって」
優和がそっと耳打ちをした。
「がんばる」
僕は優和に頷くとステージに向かった。

優和はいつものように僕の歌をジッと聴いてくれていた。他の客は大笑いをしていたが、初めて聴く保坂に笑いはなかった。
「シュウ、格好良かったぞ」
保坂が労う。
「驚いただろ」

「ちょっとな」
「はっ、はっ、はっー」
僕は腰に手を当てて胸を張った。
上手くは歌えなかったけれど気持ちよかった。保坂を驚かせ、店内を盛り上げた。僕はこれでいいんだと思った。
「おっ、俺の番だ。ちょっと行ってくる」
保坂はウーロンハイを一口飲むとステージに向かった。
「音、外れちゃったね」
優和が微笑む。
「ごめんな、あんなに練習したのに」
「んーん、そんなことないよ。最初の頃より上手くなってるもん」
「そうかなぁ」
「そうだよ」
僕達は保坂の歌をバックにグラスを重ねた。

形は違ったけれど、僕は復活した。
このことがきっかけとなって、僕は他の客とも仲良くなった。やがて、僕にリクエストをする客まで現れるほど、僕はこの店の名物となり、有名人となった。

「ごめん、寝坊しちゃった」
「はい、これ。お詫び」
「サンキュ」
今や定番となった優和の理由とお詫び。
僕の練習は復活とともになくなったが、僕達のＤＯＮＤＯＮでの待ち合わせは続いていた。
「どこ行く？」
ドーナツを食べ終わると必ず言う優和のセリフ。
「どこ行きたい？」
僕も決まって聞き返す。
この定番のやり取りも、心地のよいひとときだった。
二人だけの秘密、ＤＯＮＤＯＮでの待ち合わせ。あの時見たカップルのように、僕達もＤＯＮＤＯＮの風景の一部になれた気がした。

あのカップルはこの店で度々目撃することができた。もうあのカップルを羨ましく思うことはなくなったが、僕がいつの間にかライバル心さえ抱いてしまうほどに、二人は相変わらずの仲だった。
一度だけ優和が先に来ていたことがある。優和は僕の姿を見付けると急かすように手招きをし、僕が席に着くと指差して耳打ちをした。
「ねぇ、あのカップルいいよね」

僕達は毎週、リップ・スティックで会った翌日にはＤＯＮＤＯＮでこんなふうに定番の再会をしていた。これといって何処に行くでもなく、ただ一緒にいただけだったが、僕達はそれでよかった。お互いの部屋を行き来したり、近くの公園や神社を散歩する。一緒にいられれば、それも最高の時間となった。

このことは二人だけの秘密だったから、当然保坂は知らなかった。しかし僕達もまた、別れの結末を迎えようとは、この頃は思いもしていなかった。

この年の冬、僕達はクリスマス・イブを祝った。パーティーは僕と優和、保坂に優和の親友の友花ちゃんを交えて、ママが貸し切りにしてくれたリップ・スティックで開かれた。ママはシャンパンとケーキまで用意してくれていて、僕達は感動と感謝で最高のクリスマス・イブを過ごすことができた。

保坂は白い髭に赤と白の衣装でサンタに、優和と友花ちゃんも可愛いサンタの衣装でレディサンタに、僕達のたってのお願いに用事を済ませてから途中参加したママは、角の生えたカチューシャと赤い玉でトナカイに変身した。僕はというと緑色の大きな布を被され、色とりどりに飾り付けられると、手作り感たっぷりの紙で作られた金の星を頭に付けられてクリスマス・ツリーにされた。

保坂は格好良く、優和と友花ちゃんは可愛く、ママは綺麗に各々変身したが、僕は変身したのではなく、させられた。しかも綺麗ではあるが微妙な存在に。

何処で調達してきたのか、保坂の用意した衣装は僕達のパーティーに華を添え、盛り上げの一翼を担った。

パーティーも終盤になると、保坂サンタが白い大きな袋から、この日のために用意した五つのプレゼントを取り出した。僕と保坂で用意した三つのプレゼントと優和と友花ちゃんで用意した二つのプレゼント。
「はい、友花ちゃん」
「ありがとう、中山君、保坂君」
保坂と会うのはこの日が初めてだった友花ちゃんは、僕とはカラオケの特訓中に優和と三人で歌った仲で、既に二度会っていた。しかし友花ちゃんは「親しき仲にも礼儀あり」なのか、畏まった表情で深々と頭を下げた。
「はい、優和」
「ありがと、真ちゃん、シュウちゃん」
優和は友花ちゃんとは逆に、満面の笑顔でペコッと頭を下げると、友花ちゃんと二人で「んふぅ」と喜びのにんまりを振りまいた。
「ママ、ママにも」
「え？」
「真ちゃん、シュウちゃん、いいの？　私までもらっちゃって。私なんにも用意してないのに…」
ママが涙ぐむ。
「そんなこと気にしないでよ。いつもママには格安で飲ませてもらってるんだから。じゃなきゃ俺達みたいな若造がここで飲めるわけがないじゃん。今日だって貸し切りにしてもらったばかりか、ケーキとシャンパンまでサービスしてもらってるしさ」
「でもなんだか悪い…」
「ママ、もらってあげて。真ちゃんとシュウちゃんの気持ちだから」
ママの膝に手を置いて、優和が保坂をサポート。
「そうそう、俺達の感謝の気持ちだから」
僕が優和のサポートをサポート。
「じゃぁ、有り難く…」

ママはプレゼントを胸に抱きしめた。
「二人とも、ありがとう」
「じゃぁ、早速、シュウちゃん、開けていーい？」
「もちろん」
「ママも一緒に開けよ？」
「―じゃぁ、せっかくだから…」
『はい』
僕と保坂の快い返事に、三人は包み紙を開けた。
「なんだろうね」
「なんだろう」
優和のコソコソに、友花ちゃんもコソコソ。
「わぁ、ピアス…。可愛ぃ」
「中山君、保坂君。ほんと、ありがとう」
友花ちゃんの満面の笑み。
「私のはイヤリングになってる…」
「えー、よく私が穴開けてないの分ったね」
「シュウが気付いたんだ」
「へえぇぇぇ」
優和は閉じた唇の左右の端を吊り上げた奇妙な笑みを浮かべて、
「んふふふ」と僕の表情を探るような視線を向けた。
「そ、そりゃあ、まぁ、ねえ、そのくらい俺だって―」
「ふううん、そっか」
「な、なんだよ」
戸惑う僕に、優和はニコッと微笑んだ。
「んーん、なんでも。ねぇ、着けてみていーい？」
「う、うん」
優和と友花ちゃんはキャッキャ、キャッキャ言いながら着け始めると、ものの数分で「どーお？」と、両の耳たぶを僕達に披露した。
「可愛いよ」
「シュウちゃんは？」

「二人とも似合ってる」
「ほんとー？　よかったぁ」
「真ちゃん、シュウちゃん、ほんとにありがとう」
優和と友花ちゃんはお互いを見合うと、「んふぅ」と二人だけの空間を造り出した。
「ど、どうかなぁ」
そんな二人をよそに、ママが遠慮がちに僕達に見せた。
「ママ、すっごく綺麗」
「わあぁぁぁ。いいよママ、それ」
「ママさん、綺麗」
保坂の声に二人が元の空間に返ってきた。
「そお？」
「ねえ、いいよね、シュウちゃん」
優和が見る。
「うん、とっても似合ってる」
「ほんと？　よかった。真ちゃん、シュウちゃん、本当にありがとう」
僕達は、ママには奮発してダイヤのピアスを、優和と友花ちゃんにはハートのついたシルバーのイヤリングとピアスをそれぞれにプレゼントしたのだった。
「じゃぁ、真ちゃんとシュウちゃんの番ね」
「保坂君、中山君、開けてみて」
「おう」
「シュウちゃんも」
「うん」
ガサ、ガサガサ…。
「へー、名刺入れか、いいね。あっ、これってブランドもんじゃん。高かったんじゃないの？」
保坂が二人に気を遣う。
『全然』

決め顔を揃って決めた優和と友花ちゃんは、ピンと立てた人差し指を左右に振った。
「シュウちゃん、どお？」
優和が素知らぬ顔で覗く。
「…え、う、うん」
「―気に入った」
「そお？　よかったぁ」
動揺する僕に、優和の悪戯顔の微笑み。
優和がサンタの袋から取り出した僕と保坂へのお揃いのプレゼントは、僕のにだけメッセージカードが添えられていて、僕はその名刺入れの中のメッセージを保坂に気付かれないようにこっそり読んでいた。

メリークリスマス、シュウちゃん。

早いよねー、
シュウちゃんと出会ってから、
もう、一年半以上が経ったなんて。

シュウちゃんは覚えてないと思うけど、
私ね、実はシュウちゃんに会ってるんだよ、
ワールド・ホームセンターの肉売り場で。
どお？　驚いた？

サプライズはこの辺にして、
シュウちゃん、これからの一年も、
これまでのようによろしくね。

このメッセージの通りに、次の一年も僕と優和の間には緩やかで

穏やかな、そして僕にとっては幸せな時間が流れた。

恒例となった？　クリスマス・パーティーを翌日のクリスマス当日にしてもらっての二度目のクリスマス・イブ。

初めて迎える二人だけのクリスマス。僕達は二人で見付けた港の見えるレストランを予約していた。こういう時でしか飲めないような高級ワインで乾杯をして、ウインドウの夜景に酔いしれた。優和は僕のプレゼントしたクロスが三つ付いたペンダント・ネックレスに喜んで、胸元に光らせながら。

「来年もまた来ようね」

この季節、街の何処を歩いても美しい。普段の夜景に、この日のためのイルミネーションがプラスされ、透き通った空間がそれを鮮やかに映す。

帰り道。酔いのせいなのか、それとも今日という日だからなのか、優和は車道と歩道を仕切るコンクリート製のガードレールの上を、天秤のように手を広げてバランスを取りながら歩いた。ふらついて足を踏み外してはケラケラ笑う。さっきまでの時間の余韻を楽しんでいるかのように。

僕が初めて見る優和の一面。
―か、可愛い。やっぱ可愛いなぁ。
そんな優和も可愛いと思った。愛おしく思った。なのに僕は何故かその横顔に、僕達の時間がそんなに長くは続かないように感じられてならなかった。
永遠を望む一方で、幸福ゆえの負への恐怖からだったのか、僕は三年後、五年後の僕達をその時何故か思い描けなかった。
こんなに好きなのに。もう、優和以上に他の誰かを好きになれはしないのに…。本当に何故なのか分からない。

三度目のクリスマス・イブ。
一大決心を胸に秘め、ダイヤのリングをポケットに忍ばせた僕に、訪れることはなかった。
一人きりのクリスマス・イブ。

この年、優和は東京の本社へ移動になっていた。
それまでのようには会えなくなったものの、それでも月に一、二度、時間を作っては会い、どちらかの部屋でその日一日を過ごした。電話も毎日欠かさなかった。しかし、十二月に入ってからは、十月

には去年のレストランを早々に予約して、お互いその日が来るのを楽しみに待っていたはずの僕達の電話のやり取りはなくなった。電話をするのを控えようという優和の申し出に、一瞬戸惑ったものの、仕事の忙しさから僕もその方が都合がいいと思ってしまい、賛成したからだった。突然の申し出だったが、仕事にかまけた僕は、「どうせイブには会えるんだから」と高を括ったのだ。
実際、僕は優和の声を聞きたいと思いつつも、その申し出から一度も電話をしなかった。

赤いバラが一輪飾られたテーブルクロス。
優和はいつもの如く遅れぎみ。

四十分が経った。
電話をしても繋がらない。
なにかあったのか？　それともただ遅れているだけ？

五十分。
やはり電話は繋がらない。
心配が募る。

一時間。
「中山様…」
レストランの人達も心配する中での、優和からの電話。

「…ごめんね、シュウちゃん」

電話はそれだけを告げて切れた。
僕はそのまま赤いバラのテーブルクロスを後にした。

一人きりのクリスマス・イブ。
予約していた去年と同じワイン。一人じゃ乾杯もできない。
あの時描けなかった未来が、今日来るなんて…。
埠頭から見上げた空は今にも泣きだしそうだった。
夜空が歪んだ。

―もう、これは必要ない…。
降りしきる雨に打たれながら、僕は港の光に輝きを一つ加えた。

僕の回想録はここで終る。
この回想録、実はこの後まだ続きがあったのだが、どういう訳か書き進めていくにつれ、回想録が僕の意を離れて独り歩きし始め、とんでもないフィクションを生み出そうとし、文字にはしなかったものの、僕が自己嫌悪の中に、ここで終わらせたものだった。
文章を書くのが苦手な僕が、優和への想いを断ち切るために選んだ方法、回想録。何気なく選んだにしては、確かにこの方法は僕を成功に導いてくれた。しかし同時に、曰くの付いたものにもなってしまっていたのだ。

「まだかよ」
「もうじき来るから、もうちょっと待ってよ」
僕は少々苛立っていた。
妹に無理矢理連れてこられたファミレスには、何故か妹の友達が既に二人来ていて、僕は初めての顔ぶれを前にしていたのだが、女性三人に囲まれたこの構図にはさすがに抵抗があり、できるだけ早くこの場を離れたいと思っていたからだった。
「誰が来るんだ？」
「いいから、いいから」
テーブルを囲む妹達は、そんな僕の苛立ちをよそに、明らかにこれから来る人との出来事に期待を秘めた笑みを浮かべていた。その

表情は、たぶん僕でなくても実に不気味に映っていたと思う。

『あっ、来た来た』
妹の友達のはしゃぐ声と視線に、入り口を背にしていた僕は反射的に振り返った。
え？
「私、迎えに行ってくるね」
「あー、私もー」
僕と妹を残して入り口へと席を立った二人の更にその先にその人は立っていた。
「どう？　驚いたでしょ、お兄ちゃん」
「……」
二人に連れられて、優和がゆっくり歩いて来る。
「お前、…なんで」
「だって高校の同級生だもん」
僕は驚きを隠せないまま、半開きになった間抜け面で、妹の顔をまじまじと見た。

「じゃ、お兄ちゃん、後はよろしくね」
妹達は僕の前に優和を座らせると、相変わらず間抜け面でいる僕にはしゃぎながら去っていった。
「……」
僕は戸惑いの中で三人の後ろ姿を見送った。

「久し振りだね、シュウちゃん。元気だった？」
なおも戸惑いを隠せないでいる僕を敏感に感じ取っていたのか、微笑みとともに先に口を開いたのは優和だった。

「う、うん」
うわ、やっぱ可愛い。
断ち切ったはずの想いが蘇る。
「五年？　ぶりかな」
「―うん」
「驚いたでしょ」
「う、うん。まあ」
「うん、ばっかだね」
優和が微笑む。
懐かしい…。この笑顔、ちっとも変ってない。
「―あの時は、ごめんなさい」
優和は深々と頭を下げた。
「私、こんなんなっちゃってたから…」
「―いつから？」
「八月には症状が出てたんだけど、十二月を前にした頃にはもう…」
「八月？　そうかぁ…、全然気が付かなかった」
「必死で隠してたから…」
「でもね、普段何気なくしていたことがなかなかできなくなってくると、それが物凄くもどかしくって、できない自分にイラつくの。だんだんシュウちゃんとの電話も辛くなってきちゃって…」
「―それで電話を控えようって…」
「うん。―あの頃私、最悪だったから」
最悪なのは僕の方だ。優和がそんな苦しみの中にいるとも知らず、僕はその電話に感謝したのだから。
「―それで結局、実家に戻ったの。あのイブの日に」
「―そうだったんだ…」
「本当に、ごめんなさい」
優和が再び深々と頭を下げた。
「あ、いや、べつにいいよ。そんな―」
あっ。

優和のあまりの恐縮に慌てた僕の手は、テーブルの上のコーヒーカップをガチャンと倒してテーブルを汚した。
あちゃぁ。
僕はウエイトレスを探して店内を見渡した。
「あのー、すいませーん」

「シュウちゃん、変わってないね」
「ま、まあね。俺はいつでもこんなだから」
「―俺な、今、夢を見てるんじゃないかと思ってるんだ。でも夢なら覚めないでくれって」
「私も」
「―あの後、シュウちゃんのこと、何度も何度も忘れようと思った。でも、どうしても忘れられなくて…。無理矢理忘れようとするとね、逆に会いたくて会いたくて、どうにかなりそうになるの。ずっと会いたいと思ってたけど、私、こんなだから…。だから結衣達に感謝なの」
「結衣に？」
「うん。友花に聞いたんだって。ウチに遊びに来てくれたの。それでシュウちゃんと結衣が兄妹だって知ったんだけど、私、驚いちゃった。まさかシュウちゃんが結衣のお兄さんだなんて。結衣もシュウちゃんと私が付き合ってたって聞いて驚いてたよ」
「俺も結衣に聞いてビックリしたよ」
「私ね、シュウちゃんちに遊びに行ったことあるんだよ」
「へー、そうなんだ」
「その時はお兄さん、いなかったけどね」
「その頃はもう、アパート暮らししてたから」
「そうだね。会うわけないよね」
僕は妹が優和だけでなく、友花ちゃんとも友達であることにも驚いていた。そして、妹の交友範囲の広さに、世間の狭さを感じずに

はいられなかった。
「今はどうしてるの？」
「去年やっとね、また一人暮らしを始めたの。今はどうにかこうにか、なんとかやってる」
「大変…じゃないの？」
「もう慣れた。―これもね」
優和は白杖を手に、明るく微笑んだ。
僕達は時間の経つのも忘れて話に夢中になった。ＤＯＮＤＯＮやリップ・スティックでのことは懐かしみながら、この五年間にあった様々なことは興味深く。

今思えば、僕はこの再会に疑問を思うべきだった。何故なら、この再会は僕が封印した回想録の、フィクションの再会そのものだったのだから。

妹の善意と悪戯心？　による再会から七ヶ月が過ぎようとしていた。僕は週の半分を優和の部屋で過ごすようになっていて、その充実した幸せな毎日の中で、僕が封印したフィクションは、それ以来現実とリンクすることは一度もなく、いつしか“偶然”と“忘却”の二つの言葉で、心の奥底に片付けられていた。その日が来るまで

は。

七月十日。
「もうじき誕生日だね」
「あぁ、そういえば…」
「プレゼント、なにがいい？」
「プレゼント？」
「そう、プレゼント」
「プレゼントかぁ…、そうだなぁ…」
「ないの？　ほしいもの」
優和が覗く。
「んー、じゃぁ、ＣＤにしようかな、オムニバスの。買おうと思ってたのがあったんだ」
「オッケー、分かった」
ん？
―待てよ？　これって…。
―この件って…、まさか。
フィクションと現実がリンクした瞬間。二度目のリンク。蘇る“偶然”と“忘却”。
「あっ、やっぱりネクタイにしよう。そういえば夏物を新調しようと思ってたんだ」
「いいよ。じゃぁ、ＣＤとネクタイね」
「いや、ＣＤはいいから―」
「どうして？　買おうと思ってたんでしょ？」
「そうだけど…」
「あー、もしかして予算のこと心配してる？」
「大丈夫よ。私だってバイトしてるんだし、それくらいの蓄えあるんだから」
「あ、いや、そうじゃなくて」

「ん？」
「ーいや、なんでもない。ありがとう」
僕がリンクからの回避のために、慌てて出し直したリクエストは、結局、優和に金銭面での負担をかけただけだった。
「なぁ、いつ買いに行くんだ？　もしかして、今日じゃないよね」
「そのつもりだけど」
「そっか…」
「なにかあるの？　今日」
「いや、なにもないけど…」
「どうしたの？　今日のシュウちゃん、なんか変だよ？」
「そ、そんなことないよ。いつもと変わんないよ」
「そぉお？」
「うん」
「ならいいんだけど」
優和は食べかけのトーストを一口パクッとすると、ニコッとした。
「実は今日ね、バーゲンがあるのよ」
「へー」
「だからついでに寄っていこうかなって思ってたの」
「あっ、じゃぁ、俺、迎いに行くよ」
「ほんと？　それ、すっごく嬉しい」
「だろ」
二度目の回避への抵抗。
「何時にする？　待ち合わせ」
「そうだなぁ、今日は五時にはあがれると思うから、六時じゃどうかな」
「六時ね、分かった」
「あ、そうそう、今日、なに食べたい？」
「肉」
「肉？　またお肉？　好きだよねー、シュウちゃん、お肉」
フィクションでは、優和は一人での帰宅だった。時刻も五時だ。

僕はこれで回避できると思った。後は確実に実行すればいいだけだと。ただ、それでも、まだ始まったばかりの一日に、これから過ぎていく一日に、僕は不安と緊張を覚えずにはいられなかった。

「やばいなぁ、怒ってるかなぁ」

仕事が思いのほか長引いて、既に十五分の遅刻だった。

「もしかして、帰っちゃってるとか…」

―まぁ、でも、それならそれで、もう五時は過ぎてるし、大丈夫だろう。優和には帰ったら謝ればいいしな。

とはいえ、やはり一抹の不安は拭いきれなかった。優和の顔を見るまでは、無事アパートに着くまではと、僕の緊張が晴れることはなかった。

僕はアクセルに力を込めた。

優和のアパートからそれほど遠くない、僕の会社からも二十分程度の距離にあるショッピングセンターの駐車場に着いたのは、結局、二十五分遅れでのことだった。

駐車場の中を待ち合わせた場所まで徐行する。

あ…。

一つの安心。

一つの罪悪感。

七月の蒸し暑い気温の中で、優和は両手に買い物袋を下げ、視線を落したまま駐車場のフェンスに凭れかかっていた。

僕は車を寄せると優和のもとへと急いだ。

「ごめん、遅れた」

「んーん、私も今来たとこだから」

微笑む優和だったが、その額や首筋からは水滴にも似た汗が噴き出していた。

「持つよ」
「ありがとう」
一瞬触れた優和の手の中のハンカチは、びっしょりと水気を帯びていて、あきらかに何十分もここで待っていたことが分かった。

カシッ。
「あっ、ごめんなさい。私…」
「大丈夫ですよ、気にしないで下さい」
駐車場を歩いていた優和は、トランクに荷物を入れていた男性の足に白杖を当ててしまった。
「―あれ？　―藤井…さん…、ですよね」
「え？　は、はい。―そうですけど…」
「あー、やっぱり。私です。保坂です。その節はお世話になっちゃって、ありがとうございました」
「保坂…さん？」
「はい。保坂真一です」
「ああ、あの時の」
「覚えていてくれたんですか？　嬉しいなぁ。」
「だって、お互いに同姓同名の友達がいるって…」
「元気ですか？　もう一人の保坂さんは」
「はい、相変わらず」

「そうですか、それはよかった。いやー、なんだか他人の気がしなくてさ、その保坂さんとは」
「分かります。私ももう一人の藤井さんて、気になりますもの。―その後、藤井さんとはどうですか？」
「ずっと想い続けてきた彼と、今はめでたく付き合ってます」
「そうですか…」
「ちなみにその彼ってのは、私の親友なんですけどね」
「じゃぁ、あの時計は？」
「あの時計は残念ながら彼女の友達に当たりました」
「そうですか…。わざわざ取り寄せまでしたのに、残念でしたね」
「まぁでも、仕方ないですよ。必ず彼女に当たるってわけではなかったんですから」
「でも―、私が言うのもおかしいですけど、やっぱり残念です」
「ありがとうございます。そう言ってもらえただけで光栄です。あっ、よかったらお持ちしましょうか？」
「あっ、ありがとうございます。でも、すぐに迎えが来ますので…」
「彼氏ですか？」
「え？　え、ええ、まぁ、はい」
「そうですか、いいですね。仲がいいんだぁ」
優和の頬が色付いた。
「じゃあ、私はこの辺で失礼させて頂きます。彼とお幸せに」
「あ、はい。保坂さんも」

「そうかぁ、それは残念だったなぁ。なんか俺も他人事とは思えないや」
「でしょお、それでね―」
駐車場を出ると国道を進み、回転寿司の“にこにこ寿司”がある交差点で右折する。そこから三つ目の信号を左折すれば、もう、優和のアパートまでは百メートルとない。
この時期、六時半を過ぎても空は驚くほどに明るい。生い茂る街路樹の緑は、黒ではなく、木々の緑としてまだ十分に映り、存在感のない街灯の明かりが寂しく見える。
あと少しだ。あの信号を左折すれば…。
僕は二つ目の交差点で信号待ちをしていた。
助手席では優和が“もう一人の優和と保坂”の話を続けながら、心地よさそうにエアコンの風に髪をなびかせている。
ここまで来たら変わったことをするのは避けたほうがいい。なるべく周りに溶け込んで目立たなくなったほうが…。慎重にするのは大事だけど、慎重になり過ぎて目立ってしまってはだめだ。
リンクからの回避。今日一日の最大の課題にして、必須事項。既にあのフィクションとは完全に違っている。僕は完遂を確信する一方で、全くなんの根拠もない自論ながら、無事アパートに着くまではと、まるでライオンに狙われたヌーの群れの中の一頭のように、なおも警戒を怠らなかった。
信号が青に変わった。
よし。“赤信号みんなで渡れば怖くない”、だ。
僕は前を連なる車の列に合せて加速した。

三つ目の信号。
おいおい、早くしてくれよ。

歩行者が横断待ちをしている僕をよそに、“当然の権利”といった顔で横断歩道を渡る。
早く、早く…。
横断歩道を自分達の空間に浸りながら渡っていく歩行者達に、僕は目の前のゴールをお預けされているようで、イラついた。
よし、これでもう大丈夫だ。
やっと途切れた歩行者の横断に、一瞬訪れた今日初めての安堵感。その安堵感からか、動き出す瞬間、僕の目に、白杖を手にこれから渡ろうとしている見覚えのある顔が留まった。
あ…。
あの人って確か…。

ガッシャーン。

衝撃とともに車のスピンを感じた。一瞬の激しい遠心力に体は動かなかった。

…なんだったんだ？　今のは。
辺りは恐ろしいほどに静まり返っていた。
―ん？　誰か呼んでるか？
―救急車？
救急車って…。
…事故に遭ったのか？　俺。
！　優和は、優和は大丈夫なのか？
…動かない。
僕は指すらも動かすことができなかった。
「しっかりしろ。今、救急車が来るからな」

あと少しだったのに…。
僕は薄れゆく意識の中で呟いた。

「シュウ、来たぞ」
「昨日な、ママがさぁ―」

保坂は度々僕のもとへと来てくれた。あの事故からひと月が経った今でも、暇を見付けては花を供えて、色々とその後のことを話してくれる。

僕は前方不注意の二トン車に追突されて、病院に運ばれた時にはもう手遅れだったそうだ。
優和は重傷を負って今はまだ入院中だが、命に別状はなく、後遺症も出ないという。
保坂は奇跡だと驚いていた。僕もそれを聞いてホッとしている。ただ、残念なのは、たとえ不可抗力とはいえ、優和に痛い思いをさせたばかりではなく、優和の記憶の片隅に、本来ならばないはずの悲しみを残してしまったことと、優和の他にもう一人、あの時僕が目に留めた、白杖を持った女性も巻き込んでしまっていたことだ。
彼女に何があったのか、彼女もまた、白杖を手にするようになっていて、髪を短くしてはいたけれど、彼女はまぎれもなくＤＯＮＤＯＮにいたあの彼女だった。
僕は彼女のことも聞いている。
彼女の名は、藤井優和。年齢も優和と同じ二十八。そう、彼女は優和が話していた“もう一人の藤井優和”さんだったのだ。そして、なんとあの彼氏の名前は僕と同じ中山修司というそうだ。
僕と優和と保坂。偶然という言葉では到底片付けられない、このフィクションのような一致に、僕は死してなお、世の不思議を感じずにはいられなかった。
―それにしても、何故あんなフィクションが思い浮かんだんだろう。僕があんなフィクションを思い浮かべさえしなければ、リンクは起こらなかったはずなんだ。僕と優和は再会しなかっただろうから、優和が事故に遭って痛い思いをすることも、悲しい記憶を残すこともなく、いつか誰かと結婚して、幸せな生活を送ったと思うし、あの彼女だって死なずに済んだ。今頃みんな幸せに暮らしていたんだ。
僕があんな回想録なんか書かいたから、みんなを不幸にしてしまった。
回想録。全てはあれから始まっている。
フィクションと同じ再会。

リンクの始まり。
この世の中で僕だけが知り、そして体験した忌々しい現象の始まり。
悲劇の始まり。
結局、一度リンクしてしまったら、もう逃れることはできないということなのか、優和の死をもって完結する、僕が封印したこの世には存在しないフィクションは、エンディングを変えてちゃんと完結した。

もしも僕が、リップ・スティックを見付けなかったら…。
もしも僕が、肉売り場に行かなかったら…。
もしも僕が、優和、君を好きにならなかったら…。

僕はあんな回想録に、わざわざご丁寧にタイトルまで付けていた。
『ＹＯＵ　―君に会いたくて―』なんてタイトルを。

『ＹＯＵ　―もしも僕が…。―』　完

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7182i/

ＹＯＵ ― もしも僕が…。 ―

2010年10月9日21時01分発行